



ぷらすアルファ

目黒女児虐待死 「一日里親」子守る地域の挑戦

毎日新聞 2018年7月6日 東京朝刊



船戸結愛ちゃんが虐待され死亡した自宅のアパートには「ゆっくりあそんでね」と書かれたぬいぐるみが手向けられていた＝東京都目黒区で2018年6月8日、玉城達郎撮影

ぷらすアルファ (a)

東京都目黒区で船戸結愛（ゆあ）ちゃん（当時5歳）が虐待され死亡した事件は6日、両親の逮捕から1カ月を迎えた。全国の児童虐待件数は年間12万件を超え、増加の一方だ。家庭で起こる子どもへの虐待事案を防ぐため、私たちに何ができるのか。地域の人たちが一日だけ「里親」のような役割を担うことで、虐待を防ごうと動き出した。

●親の育児疲れ解消

「初めて食べたいものを聞いてもらえた」「ギョーザが手作りできるなんて思わなかった」。親が子供の面倒を一時的に見られない時に、地域の一般家庭が子供を預かる「ショートステイ協力家庭」という制度がある。実施する東京都新宿区では、預けられた子供たちから、こんな声が上がったという。

昨年度の利用者の約半数が「育児疲れ」を理由に申し込んだ。仕事に追われ、子育てに十分手が回らない時。泣きやまない子供に一日中たった一人で向き合い、手を上げてしまいそうな時……。区の支援員や家族のすすめでショートステイを利用することで、親の孤立や疲労が虐待につながることを防ぐ。子供たちにとっても、自宅と違う家庭環境で温かく迎え入れられることは貴重な経験になる。

中野区も今年、同様の事業を始めた。これまでは施設のみだった受け入れ先を、里親やファミリーサポート（地域の人々が有償で1日数時間子供を預かる行政への登録制ボランティア事業、ファミサポ）協力会員などに拡大した。きっかけになったのは、家庭で養育が難しくなった子供を18歳まで育てる里親を同区で務める主婦、斎藤直巨（なおみ）さん（43）の提案だ。

中高生の実子2人と小学生の里子1人を育てる斎藤さんは昨年、自治体などが参加する企画コンテストで「地域でつながる子育て制度」を発表、グランプリを獲得した。まず地域の人がファミサポの協力会員として登録し、数時間単位で「ちょっとだけ子供を預かる」経験と研修を積む。もっと長時間預かれると思えば、ショートステイ協力家庭として子供を1泊から2泊3日程度受け入れる。「一日里親」になるわけだ。斎藤さんは「何かしたくても、何をどうすればいいかわからない。専門家ばかり話し合い、地域の人はおいてけぼり。そこをつなげなかった」と話す。

2010年夏、東京都内で知人の里親が里子の保育園児を虐待死させる事件が起きた。同じ里親としての無力感が、斎藤さんの活動の原点だ。「命を救えなかったその子にしてあげられるのは、二度と（虐待が）起きない環境を地域に作ること。虐待する親も自分なりに頑張っている。私も多くの人に支えてもらったから子育てできた。地域の人から子育てを学び、つらいときには子育てをちょっとだけバトンタッチできたら、親は育児に前向きになれるはず」

●「子育ての伴走支援」

通常、児童相談所（児相）に付属する一時保護所や児童養護施設で預かることになると、施設数が少ないため子供は引っ越しを要する。子供にとって地域の里親に預けられる最大の良さは、慣れ親しんだ学校や保育所がある所で、信頼できる大人による支援を得ながら育ていけることだ。ショートステイの受け入れ経験を積んだ人が、「短期里親」や「里親」に段階的に進んでいければ、虐待された子供の受け皿が地域が増えていく。中野区は21年に区立の児童相談所を開設予定。区は「児相ができれば、虐待で一時保護した子供の預け先となる里親家庭が区内でもっと必要になる。ショートステイ事業はその一歩だ」と語る。

こうした制度は、ニーズはあるがあまり知られていない。板橋区の歯科医師で、2歳と1歳の2児の母でもある千葉彩さん（32）は今年、一般社団法人「RAC」を設立し、講演会などを通じて受け入れ家庭を増やそうとしている。「里親に興味はあるが、仕事や家族の都合で登録できないという人がたくさんいる。短期でも預かれると知らせることで、里親になるハードルを下げ、少しでも増やしたい」

千葉さんは大学生の頃、児童養護施設で暮らす子供たちの存在を知り、いつか里親になりたいと思うようになった。16年に夫の転勤先の宮城県石巻市で1人目を出産。夫は仕事で朝5時ごろ家を出て夜遅く帰る生活。周囲に知り合いもおらず、赤ちゃんと2人きりで過ごす孤独な日々は、雑誌に出てくるような「きれいな子育て」とまったく違った。「虐待をする親の気持ちが分かった気がした」。母親として子育て支援の必要性を感じた今、「子育ての伴走支援ができるような里親制度がもっと広まれば」と願う。

だが、善意だけでは伴走は難しい。通常ファミサポと違って心得ておくべき課題がある。これまで約10人の子供を一時的に受け入れてきた東京都葛飾区のNPO法人「特別養子縁組支援グミの会サポート」理事長、安藤莖子さん（54）は「子供が自分の家庭に戻つ

たときに再び親子関係が悪化しないよう、実の親へのフォローや、子供の不安な気持ちを受け止めることが必要になる」と指摘し、受け入れ家庭には研修が必須だと訴える。ショートステイや短期の里親に関する制度は自治体によってさまざまで、名称や受け入れ家庭の条件も異なる。協力したいと思ったら、自治体に問い合わせるしかないのが実情だ。

●児相中心からシフト

元文京区子ども家庭支援センター所長で日本大危機管理学部の鈴木秀洋准教授（行政法）は「行政だけでは限界。地域の人力が欠かせない」と語る。「子供を守るには本当は親ごと支えるしかない。児相中心主義から地域中心主義へとシフトし、地域に子供のセーフティネットを広げていくべき時がきている」と見る。

鈴木准教授が虐待の現場で見てきた親たちは、誰にも相談せず、地域との関わり合いもなく孤立していた。どこにでもある家庭の困りごとが、虐待にエスカレートする事例も多い。だからこそ、虐待事件は「遠い所でひどい人が起こしたこと」とは思わない。「目を開けば、食事支援が必要な子供、安心して眠れない子供たちが、身の回りにきつといる。地域のみんなが力を合わせたら、子供たち一人一人が自分の好きな遊びに夢中になれる日がくるはずだ」【坂根真理、塩田彩】

<虐待を防ぐための通報先>

児童相談所全国共通ダイヤル<1 8 9>

最寄りの児相につながる。24時間受け付け。

チャイルドライン<0 1 2 0 ・ 9 9 ・ 7 7 7 7>

18歳以下の子供から相談を受け付ける。午後4～9時、一部地域で受付時間延長。

妊娠SOS <<http://zenninnet-sos.org/contact-list>>

妊娠中の不安や相談を受け付ける。